志賀直哉「剃刀」における＜性＞と＜罪＞の相関性-何故＜男＞は＜男＞を殺したのか-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学大学院 公開日: 2010-03-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田中, 絵美利 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/7320

文学研究論集第15号
'01・9

志賀直哉「剃刀」における〈性〉と〈罪〉の相関性
―何故〈男〉は〈男〉を殺したのか―

A study of Naoya Shiga's "Kamisori"
―The Interdependence of Sexuality and Crime―

博士前期課程　日本文学専攻　二〇〇一年三月修了
田中　絵美利
TANAKA Emiri

①「剃刀」におけるリアリズムの可能性

かつて本多秋五は志賀直哉の社会性の欠如を指摘し、「旦那衆のリアリズム」と評し、「志賀リアリズムの限界は、社会性の欠如と思想性の稀薄と、この二つがとけ合ったところにある、といふべきかも知れない」と述べた。(1) 志賀直哉自身が渡良瀬川の公害問題に立ち上がろうとしながらも、それが自身の階級的立場から成らなかったこととも合わせ、志賀直哉あるいは志賀作品の社会性の欠如が指摘されることは多い。西垣勤は、志賀の「好悪＝善悪とする強い自我意識は、言うまでもなく、志賀自身の実生活において激しい矛盾をひきおこさざるをえ」ず、「自己の実感を全肯定する強烈なエゴイズムは、それがブルジョアジーの子弟としての階級を反映している以上、社会の不正義との全面的な対立に進むことに歯止めをかけ、できるだけ狭い範囲に反発・対立を押しとどめようとする」と述べた。(2) 更に中村光夫は、このような志賀の生み出す作品の特徴に関して、「そこに種々の人物が登場しても、その全貌が描かれている人物は作者であり主人公である『私』だけであり、他の人物は最も重要なものでさへ『私』の手のとどく範囲からはみだすまいとして呼吸してゐる『私』の配下達にすぎ」ず、「こうした作品がその鑑賞のためにあらかじめ読者から要求する条件が、一般の私小説のやうに作者の生活感情にたいする同意や同感どころではなく、あたかも『配下』

としての服従であること」を指摘した。[3]

北谷優子はこれらの論を引いた上で、「剃刀」を「非社会性を持つ作品」と定義した。[4] その根拠は以下の通りである。

志賀直哉の「剃刀」には、村も町も社会という大きな共同体も描かれていない。

そこには、人間が生きていく上で、最低限必要な〝縁〟でつながった共同体しか、存在していないのである。

志賀直哉が、外よりもむしろ内面的なものしか、徹底的に追求しなかったのは、非社会性であったのは、そこに社会と自分自身の立場との間の矛盾が渦巻いていたせいかもしれない。

また、藤田富士雄も、「穿った見方をすれば、社会批判性の強いものは、なるべく避けようとした志賀の自己規制が働いたのではないか」、「志賀は、三度の改稿を経て、当初含んでいた社会的な問題を殆ど捨象してしまい、偏執的な精神分析と行動にのみ紙片を費してしまった」と、北谷と同様の見解を示している。[5]

しかし、果たしてこのような評価は、志賀〈犯罪小説〉に対して妥当であると言えるのだろうか。「剃刀」に社会性は皆無なのだろうか。

北谷論に目を通していて疑問を感じるのは、「剃刀」には「人間が生きていく上で、最低限必要な〝縁〟でつながった共同体しか、存在していない」という指摘である。確かに、「剃刀」の舞台は主人公の生活の場であり、労働の場である「辰床」で、そこから一歩も外に出ようとはしていないが、主人公芳三郎が剃刀を突き立てたのは〝縁〟でつながった家族でも店の小僧でもなく、〝縁〟もゆかりもない名も知らぬ男であった。大体、北谷の論も藤田の論も、志賀の「剃刀」を大正三年七月に発表された中村吉蔵の戯曲「剃刀」と比較した上での、相対的な見解である。藤田は、三回の改稿を通して、表面上に現れる、社会性を含有すると思われる語句の減少を指摘し、そこから「社会的な問題をほとんど捨象」と言っているが、表面上の言説の数の具体的数量によって社会性は計り得るものだろうか。彼らは、志賀の「剃刀」のリアリズムの可能性を追求することなく、相対的に判断し、斥けてしまっている。

ここで、北谷の「『剃刀』には、村も町も社会という大きな共同体も描かれていない」という指摘に対し、「剃刀」のリアリズムの可能性を内包すると思われる、いくつかのキーワードを挙げてみたい。

①麻布六本木
②秋季皇霊祭
③兵隊

このキーワードは、それぞれに有機的な関係性を有している。紅野謙介は、これらのキーワードに以下のような註解を与えている。やや長くなるが、「剃刀」研究において重要な指摘をしているので、引用したい。

明治四〇年代における〈麻布六本木〉という地名が喚起する文化的意味を探ることは可能だ。下町の東京人から「麻布のキが知れない」などと言われたこの薮だらけの高台に、志賀家も含めた地方出身の実業家が自分たちの拠点を築いていた。（中略）この山の手空間に異質

なのが〈兵隊〉の存在である。日本の軍事史、軍隊史や『港区史』『渋谷区史』を調べればすぐにわかることだが、明治二〇年代以降、兵営は市区改正事業をきっかけに丸の内周辺から移転し、麻布のすぐそばには歩兵第一、第三連隊をはじめとする大部隊が駐屯していた。

〈皇霊祭〉は歴代天皇の霊を祭って春秋彼岸の中日に皇居皇霊殿で行われる行事である。一九〇八年（明41）に制定された皇室祭祠令によって改めて国家的な宗教体系に組み込まれ、国家行事としての政治的意味を与えられていた。天皇家の先祖崇拝というのが表面上の意図である。先祖崇拝はそれぞれの家、土地に根差していた土着的な民俗信仰だが、天皇を祭主として国家行事にすることは民衆レベルでの宗教的心意を天皇制家族国家のもとに統合する役割を帯びていたことは言うまでもない。(6)

北谷は「村も町も社会という大きな共同体も描かれていない」と述べたが、「剃刀」の舞台が麻布六本木でなければならない必然性が、ここに読み取れるだろう。〈麻布六本木〉という土地、〈秋季皇霊祭〉の前という時間の設定がなされていることに大きな意味がある。即ち、天皇制国家の直接的な労働力＝人的資源としての兵隊が集まる〈麻布六本木〉という空間軸と、皇霊崇拝を通して民衆を天皇制国家に組み込もうとする政治的意図を持った〈秋季皇霊祭〉という時間軸が交わり重なり合ったところに、「剃刀」の舞台である「辰床」は存在しているのだ。紅野は「剃刀」の時代設定をその発表時と同じ明治四十年代であるとしているが、皇霊祭は明治十一年の式年祭・正辰祭の廃止と共に新設、明治二十四年の「小学校に於ける祝日大祭日の儀式に関する規定」では、既に春・秋季皇霊祭を学校行事として行うべき事が明文化されていた。六本木に兵営が移転してきたのが明治二十年代以降ということと併せて考えると、時代設定の幅は明治二十年代から四十年代という風に拡がる。しかし紅野も書いているように、皇霊祭は明治四十一年九月の「皇室祭祀令」によって改めて体系化、整備されているので、時代設定を明治四十一年以降、「剃刀」発表の年である明治四十三年前後とみるのは妥当であると言えよう。

このように、「剃刀」は明治四十三年前後の、〈麻布六本木〉という特定の場所を舞台として描かれているのである。紅野の言うように、「〈辰床〉は抽象的な時間空間のなかにあるわけではない。具体的な歴史文化的文脈のなかに設定されているのである」。こう考えると、北谷や藤田の言う「剃刀」の社会性の欠如という指摘は不当であると言えるだろう。「剃刀」には明らかに、社会的、政治的なコードが含まれている。主人公の芳三郎が暮らし、働く「辰床」という場所は、決して「小さな共同体」限りのものではなく、その上にある社会、更には天皇制に基づく近代国家の姿が伺える。これまでの「剃刀」論は、志賀の心境小説作家としての一面、または主人公＝志賀という神話に引きずられて、芳三郎の内面にばかり目を向けてきたが、以上のような社会的コードを指標として、芳三郎を取り巻く社会から、そして芳三郎を社会の一員として見ることから、芳三郎の内面を俯瞰することは可能である。

②「剃刀」における〈女〉
――その被支配の構造――

本「剃刀」論においては、社会的・政治的コードを軸に、主人公・芳三郎の犯した〈罪〉を〈性〉との関連から捉え直すことがその目すところであるが、ここでは芳三郎について論じる前に、まずその妻お梅に焦点を当ててみたい。芳三郎の犯した〈罪〉を〈性〉との関連の中で位置付けていこうとするのならば、もう一つの〈性〉である〈女〉について、何らかの見解を導き出しておくことは不可欠であろう。

これまでの「剃刀」論では、芳三郎とお梅との「心理的落差」[7]が指摘され、それが芳三郎を〈罪〉へと駆り立てた要因の一つとして数えられていた。紅野謙介もこの点を指摘し、「芳三郎とお梅の間のコミュニケーションはほとんど不成立の状態であ」り、また、「芳三郎の他者に対する感覚には〈私〉のなかに組み込まれた他者性を見ない性急さ」があるとしている。しかし、これらの論は単なる指摘に止まっており、何故この二人の間にコミュニケーションが成立しないのか、芳三郎とお梅の間の関係の構造はいかなるものであったのか、などという問題には踏み込んでいない。紅野謙介の、他者を受け付けずに排除する芳三郎の〈私〉の論理についての指摘も、お梅を妻でありながら芳三郎が殺した「下司張った小男」と同列に並べ、〈他者〉として一括りにしていることに何ら説明を加えていない。確かに妻であろうと、他者であることに変わりはないが、名前も知らぬまま殺してしまった男と、共に生活を営んでいる妻が同列に並べられる程、妻との間に「心理的落差」が生じていたのなら、その二者の関係の構造にもっと目を向けるべきである。

芳三郎とお梅の間に横たわる、「心理的落差」とは何なのか、それについての解答を求めるために、まずお梅の人物造形に関して見ていきたい。

北谷優子は、お梅を「夫を助け尽くす『暗夜行路』の主人公謙作の妻直子のように男性中心の女性観の象徴的存在」[8]と述べているが、確かにお梅はこの時代の理想的な女性であったと言える。この時代――先にこのテクストの時代設定を明治四十年頃であるという見解を述べた――の理想的な女性像とは、いわゆる良妻賢母であった。

良妻賢母とは端的に言えば、「妻としては夫―戸主に従属し、母としては国家への人的資源の提供をなす意味で積極的に子女育成にいそしむ女性像」[9]で、維新後の西洋からの家庭観の輸入と共に作り上げられてきた日本独自の女性観であり、それが「現実的な機能を演じはじめたのは、明治三十年代であ」[10]った。維新前と異なり、良妻賢母主義女性観では、女性に対する教育の必要を強く説いたが、女は「家族のなかでの分をわきまえ、妻として夫に敬愛随順」[11]すべきであると考える点では、儒教的思想を引き継いでいた。

「剃刀」に描かれる、お梅の芳三郎に対する献身的な態度は、良妻賢母主義的女性像と重ね合わせることが出来る。お梅は風邪で体調の優れない夫に、実に献身的に尽くしている。

> 「はばかり？」と優しく云つて、お梅は濡手をだらりと前へ下げたまま入つて来た。

「後から抱いてあげようか」お梅はいたはるやうにして背後に廻つた。

お梅は粥を煮て置いた。それの冷えぬ内に食べさせたいと思つたが疲れ切つて眠つてゐるものを起して又不機嫌にするのもと考へ、控へて居た。八時頃になつた。余り遅れると薬までが順遅れになるからと無理にゆり起した。

「お前さんそりやいけない……」

お梅は泣声を出して止めたが、諾かない。芳三郎は黙つて土間へ下りて了つた。お梅もついて下りた。

お梅は綿入れの半纏を取つて来て、子供でもだますやうに云つて、漸く手を通させ、やつと安心したといふやうに上り框に腰をかけて、一生懸命に砥いでゐる芳三郎の顔を見て居た。

（以上傍点全て筆者による）

お梅は風邪をひいている夫の体を気遣い、「優しく」そして「いたはるやうに」看病している。夫が体を治すことが第一だと考え、時間通りきっちりと薬を飲ませ、夫が無理をしようとすると、まるで自分の事のように「泣声を出して止め」ようとする。そしてまた、夫へのこの献身的な看病の合間合間に、お梅は赤ん坊の面倒も見、家族の食事の支度もしているのである。まさに休みなく働くお梅の姿は、「妻として夫に敬愛随順」であったと言える。そしてまた、芳三郎もそんなお梅の姿を快く思って見ている。お梅がこのように良妻として〈女〉の役割を黙々と遂行する姿を見てこそ、芳三郎は病気の重たい体を起こし、働こうとするのだ。[12]

確かに、お梅はその時代の理想的な女性像に程近い存在であったと言えるが、そのような女性像の造型に、現代の視点から批判を浴びせることは容易に可能である。それは、飽くまでも「男性中心」的な理想的女性像であったからである。

お梅は献身的に芳三郎に尽くしているが、芳三郎と結婚し、夫婦となる決断を自らしたのかと言うと、どうやらそうではないらしい。

芳三郎は其以前、年こそ一つ二つ上だつたが、源公や治太公と共に此処の小僧であつたのを、前の主が其剃刀の腕前に惚れ込んで一人娘に配し、自分は直ぐ隠居して店を引き渡したのである。

お梅の父親が、辰床という〈家〉を存続させる為に、源公、治太公、芳三郎の中から、最も腕のいい芳三郎を選び、お梅と結婚させたのだ。父親が婿を選んだ条件は、飽くまでも「腕前」であり、「内々娘に気のあつた」という源公は、「腕前」の点で芳三郎にかなわず、父親から選ばれることはなかった。このような縁談のなかで、お梅の意志がくみ取られたかは疑問であり、これが〈家〉の存続を主眼に置いた婚姻＝〈脅迫結婚〉であることは確かであろう。お梅は自ら望んだ訳でもない男のもとに嫁ぎ、そしてその男に献身的に仕えているのである。こう考える

と、お梅の態度は「献身的」と言うよりは、「隷属的」あるいは「盲従的」という言葉で表した方が適切かも知れない。そしてまた、芳三郎もお梅に対して好意を持っていたかは疑問であり、結婚後直ぐにお梅の父親が隠居し、芳三郎が主人に収まったことを考慮に入れれば、その安定した将来に惹かれて縁談を受けたと考えることは、十分にできるのである。

このように見てくると、お梅が父親、芳三郎という二人の〈男〉の都合で、一生を決められたということが分かる。父親には辰床の存続が何よりも重要だった。お梅は一生をその犠牲にしたと言えるが、お梅に他に生きる道があったのかと言えば、彼女にはそれしか道がなかったのである。この時代、女性に自活の道は拓かれていなかった。それは良妻賢母主義が女子教育の普及を奨励しながらも、その教育内容が男子のそれと大きく異なっていたことからもよく分かる。女性に必要とされたのは賢母、良妻になる為の教育であり、社会に出て広く活躍する為の教育ではなかった。志賀直哉の『暗夜行路』の中に、「女は生むこと。男は仕事。それが人間の生活だ。」という条りがあるが、これはまさに体制が作り上げたジェンダーイデオロギーであった。男が労働することで国に利益をもたらすように、女は子供を産み、育てることで国に利益をもたらす。女は〈産む性〉であることにより、国家体制の中に取り込まれ、支配されているのだ。ミシェル・フーコーは「人は性について、単に断罪されあるいは許容されるものとしてではなく、経営・管理すべきもの、有用性のシステムの中に挿入し、万人の最大の利益のために調整し、最適の条件で機能させるべきものとして語らねばならない。性は審判の対象となるだけではない、行政の対象なのだ。それは公共の力に属し、経営・管理の手続きを要求する。それは分析的言説によって引き受けられねばならないのである」[13]と述べているが、体制が作り上げた良妻賢母を理想とする女性像は、〈女〉を家庭の中に押し込め、生産活動から遠ざけ、再生産活動に隷属させる為の機能を有していた。女性は〈産む性〉であることにより共同体の一員とされ、〈産む性〉であることにより、その自由な〈性〉を剥奪されたのである。

「剃刀」には、お梅の他に二人の女が登場する。「霞町あたりの兵隊相手の怪し気な女」と、時子という「五六軒先の軍隊用品雑貨といふ看板を出した家の妙な女」である。「怪し気な女」「妙な女」という差別的な表現からも分かるように、彼女たちは良妻賢母主義女性像からはかけ離れた、お梅とは全く正反対の〈女〉である。具体的には描かれていないので断定することは出来ないが、彼女たちは兵隊を中心とした〈男〉たちを相手に、〈性〉を商売にしていたと思われる。お梅が時代の〈女〉の理想像を体現しているのに反して、この女たちは〈性〉を売り物にする、非難されるべき存在であった。しかし、時代の言葉が如何に彼女たちを非難しようとも、彼女たちがそこに存在していると言うことは、即ち時代の需要と供給の相関の中に彼女たちが生きていたことを表す。紅野謙介はこの点に関して、「彼らの生活に入り込み、欲望をかきたて誘惑する猥雑な空間はみな兵隊によってもち来されたものである。夥しい量で一つ所に集められた兵隊の存在が性的欲望のはけ口を近辺に呼び寄せるのであり、それに関連する商売を生み出していく」と述べている。即ち、〈男〉を国家に奉仕する直接的な労働力として収攬するシステム

である徴兵制度を正常に機能させる為には、「性的欲望のはけ口」は必要悪として認められたのである。

この論理には、女の〈性〉をわがもの顔で支配し、都合よく分類する体制のエゴイスティックな暴力が感じられる。女を〈母親型〉、〈娼婦型〉の二つに分類することが多々ある。しかし、果たしてそのような分類は現実に可能なのであろうか。この分類は、家庭の中に入る一般の女――家長制度に組み込まれるべき女から〈性〉を剥奪し、管理すると共に、男性の性欲を処理するシステムを同時に置く為のものであると言える。しかし、そのような分類が男性中心主義的で、一方的な差別であることは言うまでもない。

女たちは良妻賢母という名目によって、時間を掛けて唖にさせられていった。〈女〉たちの〈性〉は産む為にのみ存在し、国家の発展の為のものとして管理された。そして大半の女性たちは、そのような自分の被支配的境遇に疑問すら抱かず、その与えられた役目を果たすことに生を尽くしたのである。「剃刀」に繰り返し描かれるお梅の夫に対する献身的な態度からは、〈女〉たちが課せられている被支配的立場が見て取れる。お梅は、芳三郎という支配者に尽くすために、この先一生を費やさなければならない。彼女には、芳三郎を気遣う言葉の他には、他者とのコミュニケーションツールとしての言語は与えられていない。そして、そこまで尽くした夫が殺人を犯してしまった後、彼女は幼い子供を抱えてどうやって生きていくのだろうか。雇用主を失い、突然生きる手立てを失った雇用人は、どうやって生計を立てていくのだろうか。

夫の犯行前後、お梅に関する言説は一切テクスト上から消え去る。まるで、芳三郎の行動は、お梅から全く自由であるかのようだ。二者の関係が同等ではなく、支配―被支配の関係にある時、支配者は被支配者に顧慮することなく、独断で行動出来る。芳三郎は夫でありながら、妻の人生には何の責任も感じていない。このような二人の支配―被支配という関係が、二人の間のコミュニケーションを不可能にしているのではないだろうか。立場の異なる二人に共通の言語は、存在しないのである。芳三郎がお梅と言葉を交わしている時よりも、お梅の姿をよそから見ている方が快い気分を感じていたのも、このことを表していると言えるだろう。

③〈男〉であるということ
――その支配的／被支配的立場――

先に見てきたように、芳三郎とお梅の間には支配―被支配の関係が歴然と存在していた。それが二人の間の不通状態を生み出している要因の一つとして数えられるだろうことは、既に見てきた通りであるが、ここでもう一つ新たな疑問に突き当たることになる。二人のコミュニケーション不成立の構造をよく見ると、それは芳三郎の声がお梅に届かないことで起こっているのが分かる。芳三郎の意図することはお梅には伝わらず、お梅は全く見当外れなことをしようとする。芳三郎の苛立ちは募り、ついには大声を出すか、黙り込むかして、コミュニケーションを閉じてしまう。お梅もそれ以上求めることはない。繰り返すことになるが、芳三郎はお梅を支配する立場にある。支配される側であるお梅の声が、優越的な立場にある芳三郎には届かないというのはすぐに合点がい

くが、支配すべき対象として都合よく作り上げた女性像に則ったお梅に芳三郎の声――それは支配される側にとっては本来、神の声であるべきものである――が届かないというのは、二人の支配―被支配関係に何らかの亀裂が入っていると言えるのではないだろうか。確かに、芳三郎の声が、風邪によってかすれて聞き取りにくいという外的条件がそこにはある。しかし、二人の間にそれ以上の「心理的落差」とも言うべき内的要因があるのは疑い得ない。

〈男〉は家庭の中に生きる〈女〉から〈性〉を剥奪し、産む為の〈性〉ばかりを認めてきた訳であるが、では男たちは自らの〈性〉をどう受け止めていたのだろうか。芳三郎を取り囲む世界には、〈性〉的な要素が満ち満ちている。紅野謙介はこれを「芳三郎の日常を取り巻く性的トポス」と表したが、兵隊の移動と共に芳三郎の周囲に〈性〉的な空間が出現し、〈性〉を売る女、そして〈性〉を買う男たちがそこには集っている。しかし、芳三郎はこれに対しあからさまな嫌悪感を示している。嫌悪感と言わずとも、そのような〈性〉的な空間から一歩身を引いて関わろうとしていないのが見て取れる。芳三郎の手の届く範囲には〈性〉的な空間が広がり、男たちは女の〈性〉を支配できる優越的立場を利用し、その〈性〉を満足させようとしている。「辰床」の兼次郎もその一人である。兼次郎はまだ仕事も任せられない半人前でありながら、忙しい店を抜け出して目当ての女の元へ足繁く通っている。しかし、芳三郎はそのような世界に足を踏み入れることはない。芳三郎は妻帯者ではあるが、〈性〉を売り物にしている女の元へ一度や二度通うことはあり得たはずである。〈妻〉が〈性〉をもたない存在として作られている以上、男が自身の快楽としての〈性〉の満足を求めるときにその足が外へと向かっていくのは自然なことであると言える。しかし、芳三郎はそのような行動を起こしたことはないようである。芳三郎にあるのは、ただ〈性〉への嫌悪感である。

芳三郎の〈性〉への嫌悪感の由来を説明しなければなるまい。何故、彼は自らの〈性〉を否定するのだろうか。

秋季皇霊祭の前という忙しい時期に当たって、芳三郎は「一ト月前に追ひ出した源公と治太公が居たらと考へ」ている。しかし、それは叶わぬ願いである。源公も治太公も、元は芳三郎と共に働いていた仲間であったが、源公は想いを寄せていたお梅を芳三郎にとられてしまったことで、〈性〉を売り物にしている「兵隊相手の怪し気な女」の元へ通い始め、店の金にまで手を付けるようになる。もしもお梅と結婚できていたら、源公がお梅の〈性〉を支配する立場に立っていた。夫になると言うことは、一人の〈女〉を所有することでもある。しかし、それが成らなかったことで源公は自暴自棄になり、〈性〉を違う方向へ向けようとするが、逆に自らの〈性〉に支配され、職を失うことになってしまった。そしてそれは、お梅に恋していたわけではないが、同様に親方から選ばれることのなかった治太公にも伝染し、彼もまた源公と同じ運命を辿ることになってしまった。

源公も治太公も、本来は店に必要な人物であった。彼らの腕前は現在店で使っている兼次郎や錦公とは比べものにならないものであったのだろう。芳三郎は二人の腕前を失ったことをひどく後悔している。しか

し、そんな彼らの腕前も〈性〉によって支配され、押さえ込まれてしまった。彼らの腕前は社会的な制裁を受け、発揮させる機会を奪われてしまった。芳三郎は朋輩であった二人の〈男〉が、二人とも〈性〉によって身を崩し、社会的に制裁を受けているのを目の当たりにしているので、〈性〉に対して極度な警戒心と嫌悪感を抱いているのである。芳三郎が源公と治太公を二人とも追い出したのは、――まだ情状酌量の余地のありそうな治太公すら追い出したのは、自分の周囲にそのような〈性〉的な要素を残しておくことを嫌ったからである。芳三郎にとって〈性〉は〈男〉が社会の秩序の中を生きていく上での、規律を乱す危険な因子として受け止められていた。芳三郎は〈性〉に近づくことで自身の〈性〉が敏感に反応し、そしてそれによって自分の今の地位や職、それらのもたらす安定を失うことを極度に恐れていたのである。

紅野謙介は、周囲の男たちが皆〈性〉に溺れていく中で、芳三郎一人が〈性〉に対して頑ななまでの拒否反応を示していたことに関して、「彼ら（筆者注：源公、治太公、兼次郎といった芳三郎の周りの男たち）と芳三郎をわかつのは」「〈名人〉としての自負であり、親方としての誇りだ。その能力によって選ばれた者の自己管理だ」と述べている。これまで芳三郎の自分の「腕前」へのこだわり、「撫でて見て少しでもざらつけば毛を一本々々押し出すやうにして剃らねば気が済まな」いという、過剰なまでの神経質さは、「職人気質」[14]「完全主義」[15]といった言葉で説明されてきたが、紅野はこのような傾向に警告を促した。

この人物形象を「職人気質」とか「神経質」といった、そこで思考が停止してしまうような気質的な評価でくくってはならない。完全を期して仕事に向かい、一点の非の打ち所のないその完璧な成就に自己の同一性を確認し、喜びを覚える人物像としてとらえてみよう。推測すれば、小僧時代からのたゆまぬ修行と努力が彼をして〈名人〉たらしめ、立身出世の階梯を上らしめた。生来の能力とともにそれ以上の心身コントロールに長けてもいた。それが〈自慢〉であり、彼にとっての自己の根拠そのものだったと言えるだろう。

確かに、芳三郎は「十年間、間違ひにも客の顔に傷をつけた事がないといふのを自慢にしてゐ」る。その腕前があればこその芳三郎であり、その腕前が認められて先代から店を譲り受けたときには、この上ない愉悦を感じたことであろう。しかし、彼はここで余りに「腕前」に固執し過ぎではないだろうか。それは逆に彼のアイデンティティの脆さを証明しているかのようである。

芳三郎はふだんでさへ気分の悪い時は旨く砥げないと云つて居るのに、熱で手が震へて居たから、どうしても思ふやうに砥げなかつた。其苛々してゐる様子を見兼ねて、お梅は、

「兼さんにさせればいいのに」と何遍も勧めて見たが、返事もしない。けれども遂に我慢が出来なくなつた。十五分程して気も根も尽きはてたといふ様子で再び床に横はると、直ぐうと〳〵として、いつか眠入つて了つた。

芳三郎の風邪はかなり重症である。剃刀を握ろうにも、手が震えて思うようには行かない。それどころか、起きていることにすら苦痛を感じるほどである。熱と薬のせいで、彼の意識は朦朧としている。そんな体調でありながら、何故彼は尚も剃刀を握るのか。何故そこまでしなくてはならないのか。我々は誰も、お梅の「どうかしてるよ」という言葉に同調することだろう。彼はその名人たる腕前で世間から認められ、現在の地位や生活を築いているが、彼の名声が既に確固たるものになっているのならば、風邪で一日や二日休むことに何の支障があるだろうか。皇霊祭の前の忙しい時期ではあるが、近隣にはもう一件「霞町の良川」という店がある。客を取られることにはなるが、芳三郎の腕前が絶対的なものであるならば、客は芳三郎が治り次第戻って来るであろうし、体調が最悪の状態で、無理に体を動かして力を十分に発揮できずにその名を傷付けるくらいなら、「良川」に任せてしまった方がよっぽどいい。それでもなお剃刀を握ろうとする芳三郎は、自分の意志で動いているというよりも、何か見えない別の力に突き動かされているかのように見える。

また源公や治太公と共に小僧であったとき、芳三郎は彼らと共に並べられ、腕前を比較される立場にあった。しかし、その腕前を親方に認められお梅と結婚し、先代から店を譲り受けたときから芳三郎の立場は大きく変わった。その呼び名も「芳さん」から「親方」へと改められた。そして言うまでもなく、変わったのは呼び名ばかりではなかった。彼には「親方」という責任が伴うようになった。先代の親方が〈家〉の存続を第一と考えて自分の娘をその手段としたと同様に、彼もまた、なによりもまず〈家〉を守る義務を持つようになったのである。

芳三郎に〈家〉の存続という義務が課せられたとき、彼の「自慢」だった「腕前」はその必然性の質を変えることとなった。もはや「腕前」は「自慢」ではなく、手段であり、義務である。そしてその指向するところは、芳三郎という個人ではなく〈家〉である。小僧であったときには、「腕前」を「自慢」にし、そこに「自己の根拠」を求めることもできただろう。小僧という立場であったときには、お梅が芳三郎に嫁いでしまった後の源公や、現在芳三郎の小僧をしている兼次郎たちのように、仕事を怠け、〈性〉に耽溺するという選択肢が与えられていた。もちろん、そうすることは社会的にも非難され得ることで、もし芳三郎が小僧時代にそうしていたら、お梅と結婚し親方になっていたのは芳三郎ではなかったかも知れない。しかし、ここで重要なのは、芳三郎がそうすることではなく、自らの「腕前」に自信を持ち、真面目に労働に打ち込むことを自ら選択していたということである。自ら選び取った生き方が周囲から認められ、その社会的な価値が自己に還元されるとき、その選択は自らのアイデンティティとして植え付けられるだろう。人が自らの何か一部分に自身のアイデンティティを感じるとき、その何かは周囲——社会や共同体から押し付けられたものであるべきではない。人は自分が選び取ったものに価値が与えられたときに、その選び取るという行為、ひいては選び取った個人の価値として受け止め、それを「自己の根拠」とするのである。そしてまた、人が社会の中で生きる存在である以上、その価値判断は常に他人から与えられるべきだという原則がある。他者に認められることによって、人は社会化され、共同体の一構成員となる資格が与えられるのである。

芳三郎は「親方」になることにより、それまではアイデンティティと感じ取ることのできた「腕前」を自由な選択権としてではなく、「親方」としての義務として受け止めざるを得なくなった。「自慢」などと言って、その「腕前」の上にあぐらをかくことなどできる訳がない。「女は生むこと。男は仕事」と言うように、〈女〉が〈産む性〉として体制に取り込まれたのと同様に、〈男〉は〈労働する性〉として支配される。そして、それは特に、国家の中央集権政治組織の末端に位置する〈家〉の長——家長にとっては、直接的なものであった。家長は〈家〉の中では優越的な権利を与えられ、支配者という立場でいられたが、家長もまた、国家という大きな共同体単位で見たときには、国家の発展のための支配体制の中で被支配的立場に置かれていた。その特権など、国家体制を作り上げるために与えられた相対的なものに過ぎないのである。〈男〉もまた、〈女〉と同様に支配されているのである。〈家〉の長たる家長であっても、それは例外ではない。それは、芳三郎の周囲に点在して描かれる〈兵隊〉の存在に暗喩として表されている。

明治日本において初めて徴兵令が発令されたのは、明治六年であった。この時の規定では、「一家ノ主人タル者」＝家長は徴兵を免役されることとなっていた。それは「再生産単位としての戸の維持・存続に必要な中心人物を徴収することを避けなければならないから」[16]であった。しかし、そのような特権も明治十六年の改正で消滅し、徴兵猶予の権限のみとなった。更には、明治二十二年の改正でその猶予規定すら撤廃され、家長もほかの家の構成員と同等に、徴兵されることとなった。即ち、「少なくとも徴兵制度においては、すべての人間は『名義』をもたない単なる個人としてあらわれ」[17]るようになったのである。国民皆兵をスローガンにした国家体制の元では、家長もまた単なる国家の構成員の一人として数えられ、徴兵制度に適応させるべき対象——つまり、支配すべき対象として束ねられていたのである。

芳三郎は、〈家〉を守ることを義務として強いられている。彼は〈家〉を守ることで、その労働を国家に還元している。先に述べたように、男は女の〈性〉を支配しているが、家長たる芳三郎自身に〈性〉の自由が与えられるのは、家長としての役目を果たし、中央集権政治組織の末端としての〈家〉の機能を正常に果たすという前提においてである。兵営の周囲に〈必要悪〉として〈性〉的な空間が許容されたのも、兵隊たちが徴兵されたことにより人的資源としての役割を果たし、またその役割を十分に発揮させるためには、〈性〉が必要であるという相関関係がそこにはあったからである。芳三郎は家長としての役割を果たすために、その肉体を酷使していく。この時芳三郎の肉体は労働に支配されており、その〈性〉は女と同様に剥奪されていると言えるだろう。

どんなに熱が高かろうと、体がだるかろうと、芳三郎は「親方」として店から目を離すことはできない。彼には店＝〈家〉を守る義務があるからだ。ひとたび「御面倒でも親方に御願ひしますよ」と客からの要請があれば、それに応えないわけには行かない。

「畜生」と芳三郎は小声に独言して夜着裏の紺で青く薄よごれた腕を出して、暫く凝っと見詰めて居た。然し熱に疲れたからだは据ゑられた置物のやうに重かった。

彼の腕＝「腕前」はもう彼のアイデンティティではあり得ない。彼の自由な意志によってそれを発揮させることはない。彼の「腕前」は〝税〟として国家に取り込まれるべきものである。自由に動かない彼の体は、国家に支配され、〈個〉として生きる喜びと尊厳を剥奪された不如意さを表している。「腕前」を自身の「自己の根拠」として自由に発揮させることのできた、「小僧」というモラトリアム期は終わった。彼は今や国家に直接的に支配されるべき対象として、〈労働〉という血税を絞り出さなければならないのだ。芳三郎の立場は、未だモラトリアム期にある錦公や兼次郎とは大きく異なる。重たい体を無理に起こして働く芳三郎とそれを必死に止めようとするお梅の横で、錦公は「一人ボンヤリ鏡の前の椅子に腰かけ」たり、「窓の傍の客の腰掛で膝を抱くやうにして毛もない脛を剃り上げたり剃り下したりして居」る。〈家〉を背後に持たない彼にとって、〈労働〉は義務ではなく選択肢なのだ。そして彼はまた、「時子を張りに行きました」と「真面目な顔をして」答えることができる。彼らには、〈性〉もまた許されているのだ。それは、かつて選択することはなかったけれども芳三郎にも与えられていた、選択肢の一つだった。彼は今、その選択肢を持たないばかりか、それを毛嫌いすらしている。芳三郎が恐れていたのは、〈性〉による〈家〉の破壊であった。モラトリアム期にあった源公とは異なり、「親方」である芳三郎にとってはそれは自己の破壊すら意味していた。何よりも〈家〉を守るために、彼は自らの〈性〉を否定したのである。

以上見てきたように、芳三郎にとっての〈労働〉の意味を考察してきたが、男が女の被支配性を理解し得なかったように、お梅は芳三郎の立場を理解することができなかった。二人の徹底的なすれ違いの原因は、ここに求められると言えるだろう。お梅は芳三郎の〈労働〉の本質を全く理解していない。お梅の関心は、芳三郎を寝かし付けて看病するという、自身の〈良妻〉としての役割を果たすところにあり、芳三郎が〈労働〉に固執すべき理由には思い当たらない。「兼さんにさせればいいのに」「いつそ霞町の良川さんに頼む方がよかないの？」と、しきりに芳三郎の〈労働〉を制止しようとするが、芳三郎にとっては自身の「親方」としての責任は誰か別の人に転嫁され得るべきものではない。ましてや、「霞町の良川」を商売敵として見たときの競争心から、「良川」に頼むことを拒んでいるのでもない。彼はそんな卑小で相対的な競争心に固執しているのではなく、自身に強いられた「親方」という絶対的な役割に固執せざるを得ないのである。彼は、「親方」という役割に隷属せられているのである。

〈女〉を〈産む性〉として価値化し、教育を与えないことで〈労働〉の場から疎外してきたことにより、〈女〉の〈労働〉に対する無理解が生み出された。そして、そのような〈女〉の〈労働〉からの隔離・無理解は以下の場面に端的に表されている。

> お梅は黙つて半間の障子を開けると土間へ下りて皮砥と剃刀を取つて来た。そして皮砥をかける所がなかつたので枕元の柱に折釘をうつてやつた。
>
> （中略）
>
> 暫く砥石で砥いだ後、今度は皮砥へかけた。室内のよどんだ空気が

其のキュン〳〵いふ音で幾らか動き出したやうな気がした。芳三郎は震へる手を堪へ、調子をつけて砥いでゐるが、どうしても気持よく行かぬ。其内先刻お梅の仮に打つた折釘が不意に抜けた。皮砥が飛んでクル〳〵と剃刀に巻きついた。

お梅は、芳三郎のために折釘を打ってやった。それは、芳三郎の〈労働〉の領域にお梅が入り込んだことをも意味していた。しかし、お梅は〈女〉として〈労働〉から疎外されている故、〈労働〉を義務と受け止めていない。お梅にとって芳三郎の看病は役目であり、義務として完全を期した態度で行うが、〈労働〉に関してはその几帳面さは現れず、「仮に」という但し書きが伴われる。そしてそのような〈労働〉に対する観念の相違・懸隔から、お梅の打った折釘に皮砥をかけて、芳三郎が剃刀の刃をとぐという、〈労働〉の共有は為されることはないのである。お梅の〈労働〉への加担は、むしろ芳三郎の苛立ちを募らせることとなる。お梅は、芳三郎が〈労働〉を成し遂げることに関心を持っていない。彼女は芳三郎に半纏を着させることにのみ固執し、「子供でもだますやうに云って、漸く手を通させ」てしまうと、もう「安心し」てそれ以上芳三郎に構うことはない。そして、その「半纏」が〈労働〉には適さないものだということに気付くことはないのである。

このように、芳三郎とお梅の間の「心理的落差」とは、〈男〉と〈女〉の国家に対する被支配の構造の相違によるものだと言える。〈男〉も〈女〉も国家という共同体単位で見たときには、一構成員に過ぎず、国家の発展のためにその身を隷属させるべき存在であった。しかし、〈男〉は〈女〉より優越的な立場にある支配者であるという卑近な妄想に取り憑かれているため、逆に自ら作り出した理想的な〈女〉に自己の存在性を理解されないという逆説を生み出し、孤独を味わうこととなった。芳三郎は、実に孤立した存在である。周囲の誰からも理解されることなく、それでもなお、無理に自己を奮い立たせなければならない。夢遊病者のように何度も立ち上がり剃刀を握る芳三郎には、もはや〈自己〉は存在しないのかも知れない。彼はただ、〝生かされている〟のである。そしてまた、その芳三郎の横で「半纏」を持って右往左往するお梅も、〈良妻〉という役割に取り憑かれ、〝生かされている〟と言えるだろう。〈男〉も〈女〉も共に支配され、〈個〉を奪われた存在でありながら、それぞれ互いの立場への理解を可能にする言葉を持たず、互いに孤立した存在であることから逃れ得なかったところに、「剃刀」の悲劇の発端があると言えるだろう。

④ 芳三郎の殺したもの
——彼は何に剃刀を突き立てたのか——

「剃刀」論の締め括りとして、ここでは芳三郎の〈罪〉について考察しなければならない。何故芳三郎は、あの「若者」を見て突如殺意が沸いたのだろうか。芳三郎はこの「若者」と初対面であるし、この「若者」に会うまでに殺人を想起していた訳ではない。その殺意には、「突如」と言う表現がふさわしいと言い得る。では、この「若者」のどこに、芳三郎に殺人を思い立たせる因子が含まれていたのだろうか。芳三郎に究極的手段を取らせたのは、一体何だったのだろうか。

芳三郎は「若者」を見て、明らかに不快を感じている。しかし、それは故なきことではない。芳三郎は、この「若者」が客として店に入ってきたときには、男を客として認め、病気の重たい体を動かし、自ら剃刀を握ろうとしている。そして、「若者」の「親方、病気ですか」と言う「媚びるやう」な言葉にすら、「口だけの礼」ではあるが「ありがたう」と返答している。「男」は、芳三郎が〈労働〉を全うするために必要な存在であり、芳三郎は「若者」の要請に従うばかりである。芳三郎は最初「若者」を客として見ているので、まだその時点では不快な気持は「親方」としての職務に従うという強迫観念から押さえられ、ましてや殺意など思い浮かぶこともなかった。

しかし、「若者」は芳三郎とは全く異なった立場にある。「若者」はまだ二十二、三で、見るからに田舎者ということが分かるように、東京に出てきてまだそう日が経っていない。そして、昼間は肉体労働で金を稼ぎ、夜はそれを資金に町で一遊びするという、実に気ままな暮らしを送っている。恐らく、まだ所帯も構えておらず、家族や〈家〉に対する責任も全くない。まさに、「若者」はモラトリアム期を自由に生きていた。もちろん「若者」にも、〈労働〉はあった。しかし、若者にとっての〈労働〉が芳三郎にとっての〈労働〉と全く異質なものであるのは言うまでもない。「若者」には、芳三郎をがんじがらめに縛り付けている義務も責任もまだ意識されていなかった。

とは言え、そのような立場の相違のみが芳三郎に殺意を抱かせたのではない。モラトリアム期にあるという点では、錦公も兼次郎も同様である。しかし、芳三郎は錦公も兼次郎も殺さなかった。殺したのは「若者」のみである。「若者」には、もっと直接的な要因が含まれているはずである。

「若者」は、これから〈性〉的な空間に足を踏み入れようとしている。芳三郎には、それが「若者」の「少し急ぎますからネ」と「十時半と、十一時半には行ける」という言葉からすぐに感知できた。そして、それを知ったことにより、〈性〉への嫌悪感から、芳三郎は「若者」への不快を露わにしていく。「若者」の言葉に社交辞令としてでも言葉を返すことはなく、「若者」を「下司張った小男」と蔑むようになる。芳三郎は「男」とのコミュニケーションを避けている。同じ〈男〉でありながら、置かれている立場の全く異なる二人に共通の言語は存在しない。「若者」はこれから〈性〉を買いに行くことを、同じ〈男〉として芳三郎に「何とか云って貰ひたい」が、同じ〈男〉でありながら、芳三郎の〈性〉は〈労働〉に隠蔽され、芳三郎にとって〈性〉的な連想は「胸のむかつくやうなシーン」としてしか映し出されない。それに対して「若者」はしきりに「鏡にちら〳〵する自分の顔を見ようと」している。「若者」はこれから〈性〉をむさぼりに行く自分とまっすぐ対峙することができるのだ。鏡に映る自分の〈性〉を、まっすぐに見つめることができるのだ。〈性〉に対して、何の引け目も感じていない。これは「畜生」と一人つぶやき、うつむいて自分の腕を眺めていた芳三郎の様相とは対照的だ。「若者」は自分が今そこに存在していること、そしてこれから自分がしようとしていることに自信を持つことができるのだ。

「若者」のそのような〈性〉的存在たることへの自負は、何よりも芳三郎を脅かしたことだろう。「若者」の興味は芳三郎の「腕前」よりも、

自身の〈性〉にある。芳三郎の存在の基盤となっている〈労働〉に、「若者」は全く目を向けることはない。恐らく「若者」はそれまでに芳三郎の評判を聞いたことがなかったのだろう。「若者」にとって、芳三郎の「腕前」は代用可能なものに過ぎない。

切れない剃刀で剃られながらも若者は平気な顔をして居る。痛くも痒くもないと云ふ風である。其無神経さが芳三郎には無闇と癪に触つた。使ひつけの切れる剃刀がないではなかつたが彼はそれと更へようとはしなかつた。どうせ何でもかまふものかといふ気である。それでも彼は不知又丁寧になつた。少しでもざらつけば、どうしても其処にこだはらずにはゐられない。こだはればこだはる程癇癪が起つて来る。からだも段々疲れて来た。気も疲れて来た。熱も大分出て来たやうである。

芳三郎は、「若者」に「使ひつけの切れる剃刀」ではなく、わざと「切れない剃刀」を使っている。「若者」は、「御面倒でも親方に御願いしますよ」と芳三郎を指名してきた「龍土の山田」の使いの女とは違う。「若者」には、芳三郎の「腕前」に関する知識が全くない。しかし、芳三郎にはその「腕前」こそが全てである。「若者」がわざと独り言を言って自分の〈性〉への芳三郎の同調を求めたのと同様に、芳三郎は「若者」に自分の「腕前」について関心を向けて欲しかったのだ。見知らぬ男に共感を求めるその行動は、幼児的、かつ滑稽になり得る。「切れない剃刀」はそのきっかけとなる手段だったのだ。「若者」が「切れない剃刀」に気付いて、何らかの言葉を発したのなら、芳三郎は「使ひつけの切れる剃刀」と交換して、抜かりなく仕事を終えるつもりだった。芳三郎にとって「腕前」を意識されないということは、そこに存在していないも同然である。彼はそこに存在するため、「若者」を自分に向けなければならなかった。しかし、最初から「ザットでいい」とその〈労働〉の内容など気にも留めていない「若者」には、名人たる「腕前」の芳三郎が、わざと「切れない剃刀」を使っているという不調和――それは芳三郎が発したシグナルであった――にも何も感じ得ず、「痛くも痒くもない」。ここに、芳三郎と「若者」との決定的な「心理的落差」が見て取れるだろう。二人はお互いに、同じ〈男〉として自己の存在していること、その存在の根底にあるものに目を向けてもらおうと、互いの関心を請うた。しかし、二人の間のコミュニケーションは互いに一方通行であり、交わることは決してない。そしてまた、芳三郎の「腕前」＝〈労働〉は、〈性〉によってその価値を無視され、蹂躙されようとしているのである。

しかし、それでも芳三郎は〈労働〉に支配され、それを投げ出すことはできない。存在を認められずとも、剃刀を動かし続けなければならない。「若者」はいつか寝入ってしまい、芳三郎は本当に一人きりにされてしまった。芳三郎を小僧から「親方」へとし、そして客の指名を受けさせ、店の評判を高いものにしてきた彼の「腕前」は、今や誰からもその価値を讃えられることはない。芳三郎は、今そこに自分が存在しているのかさえ、確認することができない。動きにくい「半纏」を着て、「切れない剃刀」を使いながらも、まだ「こだはらずにはゐられない」

彼は、自身の孤独を痛いくらいに思い知っただろう。「半纏」はお梅＝〈女〉から理解されない孤独、そして「切れない剃刀」は同じ〈男〉にすら理解されない孤独を表している。芳三郎は〈労働〉への強迫観念と固執から「苛々して怒りたかった気分」を通り抜け、今ではもう「泣きたいやうな気分」を感じざるを得ない。彼はまさに一人きりだ。

「若者」は、芳三郎にとって〈性〉そのものであった。名も明かされず、身元も不明であるのに、一見しただけで「辰床」を出た後の行動が想起せられる「若者」は、象徴的存在として造型されている。芳三郎はあれほどに毛嫌いし、恐れた〈性〉によって、その存在を消されてしまった。それは、芳三郎が自身の〈性〉を否定したことにより、逆に〈性〉に打ち負かされたと言うこともできる。芳三郎がいかに否定しようとも、体制がいかに否定しようとも、彼の中には確かに〈性〉が存在している。それは本能であり、消し去ることのできるものではない。〈労働〉を否定され、社会から疎外された孤独の中にいた芳三郎には、痛切にそれが感じられたのではないだろうか。「若者」＝〈性〉は、芳三郎を取り込むかのような、迎え入れるかのような様相で、「たわいもなく口を開けて」芳三郎の前に提出されている。芳三郎は、今再び、二つの選択肢を前にしたのである。一つは、これまで通りの生活を続けること。つまり、それは〈孤独〉を選ぶことでもある。もう一つは、〈性〉を認め、求めること。それは、「親方」としての職務を捨て、社会からの逃亡を図ることである。しかし、その逃亡が虚しいものであることは言うまでもない。

この二つの選択肢を前にして、芳三郎が選んだのはそのどちらでもなかった。芳三郎は〈性〉を否定し、隠蔽するのではなく、〈性〉と対峙し、そして真っ向から消し去ろうとしたのであった。「若者」を剃ることは、何故だかどうしてもうまくいかない。〈性〉という本能は、〈労働〉という社会的に個人に与えられた付加条件を飲み込み、覆い尽くそうとする。芳三郎はその誘惑に、何度も全てを投げ出そうとするが、〈性〉に付けられた傷口から流れる一筋の赤い血を見た瞬間、彼の弱っていた気持ちは消え、「一種の荒々しい感情が起つた」。その赤い血の生々しい色は、人間の持つ本能としての〈性〉の生々しさそのものである。芳三郎には、先ほど胸の中に浮かんだ「胸のむかつくやうなシーン」よりももっと、肉感的で、生々しい〈性〉のイメージが思い出された。そしてそれは、自分の中に明らかに〈性〉が存在していることの証明でもあった。芳三郎は〈性〉に自身の〈労働〉を蹂躙されたことへの激しい苛立ちと怒りから、〈性〉に剃刀＝〈労働〉を突き立てる。これは〈性〉の完全否定であり、〈労働〉の完全化を目指したものだった。芳三郎は自分の中にある〈性〉を完全に否定しきることで、「親方」として生きること、〈労働〉することで社会に存在している自己を守りきろうとしたのである。芳三郎は、〈性〉への勝利を歌ったのである。自分がそこに存在していることを、証明して見せたのである。芳三郎は〈性〉の誘惑に勝ったのである。〈性〉は赤い色の血の生々しさから、「見る〳〵土色に変」り、芳三郎の前から消え失せた。芳三郎が〈性〉に翻弄されることは、もうないだろう。

しかし、先にも書いたように、〈性〉は本能である。人間の本源である。否定したとしても、否定しきれるものではないはずである。自らの

〈性〉に剃刀を突き立てた芳三郎は、もう生きた人間ではなく、「死人の様」である。彼は〈性〉を否定することで、自分の人間としての存在を否定してしまったのである。芳三郎は自分の〈性〉と真摯に対峙し、受け入れることができなかったために、自己を殺すことになってしまった。彼は鏡を見ることによって〈性〉と向き合っていた「若者」を否定し、〈性〉を超越せんがために「若者」の咽に剃刀を突き立てた。しかし、それは芳三郎の完全なる敗北であった。「死人の様」にぐったりと座り込む芳三郎を、「鏡だけが三方から冷やかに」「眺めて居」る。芳三郎がいくら〈性〉から目を背けようとも、〈性〉は芳三郎を見つけ、照らし、そして客観的な存在とする。芳三郎の〈性〉からの逃亡は、徒労に終わるどころか、芳三郎自身をも殺してしまった。〈性〉の否定、それは人間としての死である。芳三郎はこの後、社会の法の下で裁かれることとなる。しかし、その刑の軽重など問題ではない。彼はもう死んだのだ。彼は〈労働〉と〈性〉の間で苦しみ、自分の肉体を自分のものとは感じ得ない目に見えない重圧から逃れることはできたが、その時にはもう彼は「死人」であった。彼には逃げる道など、最初から用意されていなかったのである。

芳三郎を犯罪へと駆り立てたのは、社会が彼に求める〈男〉としての役割と、自分の肉体の中に何千万年も前から本能として植え付けられた〈性〉に対する焦慮との間で引き裂かれた自己の存在そのものであった。彼は自己の存在を見失っていた。支配されるべき対象として、国家の元で束ねられているうちに、彼は自己が如何なる存在なのか、人間とは如何なる存在なのか、見失ってしまっていた。彼は〈性〉を憎み、自身の前から頻りに遠ざけようとしたが、それはまた、彼の中に本能としてうごめいている〈性〉が刺激されていることの証であった。芳三郎の犯罪は、人間の〈性〉の存在を逆に証明することとなった。そしてそれは、人間の――〈男〉と〈女〉の〈性〉を剥奪し、所有する事で国民の支配を簡潔に、そして迅速に行おうとした社会、国家への批判となり得ている。芳三郎は、自身に剃刀を突き立てたことになったが、本当に芳三郎を殺したのは、芳三郎に被支配的立場を強いて、人間性を奪ってきた国家なのである。

注

(1) 本多秋五『「白樺」派の文学』昭二十九・七　講談社
(2) 西垣　勤『白樺派作家論』昭五十六・四　有精堂
(3) 中村光夫『志賀直哉論』昭四十一・四　筑摩書房
(4) 北谷優子「二つの『剃刀』――志賀直哉と中村吉蔵の思想をめぐって――」(『帝塚山学院大学日本文学研究』第二十三号) 平四・二　帝塚山学院大学日本文学会
(5) 藤田富士男「二つの『剃刀』」(『自由人の軌跡――近代の文学と思想』) 平五・十一　武蔵野書房
(6) 紅野謙介「志賀直哉『剃刀』をめぐる演習――文学への解放／文学からの解放――」(『日本文学研究資料新集21　志賀直哉・自我の軌跡』) 平四・五　有精堂
なお、これ以降の紅野の論からの引用は、全てこの注六からの引用であるものとする。
(7) 紅野敏郎『鑑賞日本現代文学⑦志賀直哉』「本文および作品鑑賞」昭五十六・五　角川書店
(8) 注4に同じ。
(9) 片野真佐子「良妻賢母の源流」(『女たちの近代』) 昭五十三・七　柏書房

(10) 深谷昌志『増補　良妻賢母主義の教育』昭五十六・一　黎明書房
筆者が〈良妻賢母〉思想を「日本独自の女性観」と記したことに註解を加えたいが、確かに〈良妻賢母〉思想は欧米の女子教育論の影響を多分に受けてはいるが、深谷昌志の言うようにそれは「日本特有の近代化の過程が生みだした歴史的複合体」「西欧の女性像を屈折して吸収した複合思想」であり、欧米の女性観とは異なるものである。

(11) 注10に同じ。

(12) 筆者はここでお梅を良妻賢母と重ねて論じているが、お梅を良妻賢母と断じているわけではない。何故なら、お梅は夫に尽くす良妻の面を見せてはいるが、国の発展に必要な人材を育成する、教養ある賢母という面は、子供がまだ乳飲み子である故に見せていないからだ。床屋の家に生まれたお梅に高い教養があったとは考えにくいが、赤ん坊の世話をするお梅の描写はいくつか示されており、良妻賢母と断じることはできないが、床屋の女房として、お梅は十分に理想的であったと言うことはできよう。

(13) ミシェル・フーコー『性の歴史Ⅰ　知への意志』（渡辺守章訳）昭六十一・九　新潮社

(14) 注5に同じ。

(15) 注4に同じ。

(16) 利谷信義「明治前期の身分法と徴兵制度――身分法における私法的性格の形成過程――」（『戸籍制度と「家」制度』）昭三十四・六　東京大学出版会

(17) 注16に同じ。

なお、テクストからの引用は、岩波書店版『志賀直哉全集』第一巻（昭四十八・五）に拠る。